

# 火星



平成18年 5月号

# 七曜抄 (三)

山尾玉藻

連翹の縛られてある夜伽かな

花の冷ふとん部屋より声のして

赤ん坊に花見せてゐる女香具師

さくら吹雪きて鶏に瞼あり

てのひらに雨粒うけし桜守

花影は鯉の口音するところ

先生はひと列車あと花の山

腰痛三日桜前線過ぎにけり

朧夜をきたる靈芝の包みなる

榛の木に大き鳥影よなぐもり

# 太白星

柳生千枝子

星 二月 心友 既に世に在さず  
暁 光の 金色 春の 雲うごく  
生腎臓手術きてゐる 意識 二月の空 深し  
振れば 鳴る 体温計や 春浅し  
小指 ほどの 筈 料理 患者 食  
物の芽の 一つ 離れてみどり 濃し  
春の 星 潤ひ 一つ 瞬けり

杉浦典子

ともづ なの 浸れる 水の 朧かな  
きさらぎの 島犬 通る 猫と ぼる

いろは丸沖に沈んでゐる朧  
潮待ちの日差しゆれをりさより舟  
あはゆきや独活小屋藁の香のこもり  
ピカソ見にゆく梅東風をつつきつて  
力石眼に春の寒さかな

浜口高子

水で水流す糶台二月なる  
寒椿ビニール傘を荒だたみ  
墨にまた水を足したり夕朧  
肩に跳ねしあかがね屋根のしづり雪  
きさらぎや葬の膳の花かつを  
きさらぎの土にひと鍬ありにけり  
押入れに夫の杖ある春の雪

# 火星作品

## 山尾玉藻選

土堤の風よんべ追はれし鬼がゆく  
野火猛りわつと増えたるカメラマン  
大湯吞抱けば鮫屋に亀の鳴く  
春一番明治生れをさらひけり  
梅林の傾きにある猫車  
潮の目のゆつくり離る水仙忌  
二月や鉄塔をおく水鏡  
春の雪菊菜畑を濡らしけり  
親牛のこゑとおぼゆる臍かな  
節分の樟の根方に待ちみたり  
春の雪地下鉄人夫入れ替る  
紅梅の沖釣舟の溜りたる  
陵を守る畦火の夜となりぬ

藤井寺 戸田春月  
明石戸栗末廣  
八幡 大山文子

この町の動物園の春の雨  
二ヶ月の闇に浮きゐる散髪屋  
花捨てし壺に耳ある朧かな  
河童絵の乳ぼつちりと朧の夜  
道化師に如月の空ありにけり  
中天に噴煙残し春立つ日  
如月や肩ふるはせて木偶の泣く  
うたかたのつらなつてくる梅日和  
沖つよりほころびはじめ神の梅  
室生寺は日差しに遠し春シヨール  
天井を見てゐる春の炬燵かな  
水飲んで袖口濡らす猫の恋  
春寒や駅の灯とどく金魚池  
目刺焼く父や火鉢の灰よごし  
落椿鑑真の日を載せてをり  
頤の重くなりけり草の餅  
つちふるや花のやうなる豚の耳

神戸元田千重

姫路松たかし

大和郡山城孝子

# 選のあとに

山尾 玉藻

土堤の風よんべ追はれし鬼がゆく 戸田 春月

「よんべ追はれし鬼」は、産土社などの鬼を想像する。鬼役はその氏子であり、作者自身がよく知っている人である。昨夜追われて逃げていた鬼が今日は颯爽と土堤の風に吹かれているのである。上五「土堤の風」と一見稚拙そうな放り出したが、ここではこの表現が効果的である。

春の雪地下鉄人夫入れ替る 大山 文子

普段、地下鉄工事現場の上らしい道路は見かけるが、実際の工事現場は殆ど知らない。「地下鉄人夫入れ替る」の情景も作者はこれまで見たことがなかったであろう。何か良いものを見たような気になったのではなからうか。「春の雪」の抒情はこの句では必要。

つちふるや花のやうなる豚の耳 城 孝子

豚の肌をピンクとか桃色と言った例はこれまでもある。それに比べ豚の耳を「花のやうなる」と言う捉え方は一歩二歩も進んでいる。「つちふるや」のモニタージュも一句を膨らませるに充分な働きがある。

播粉木のみどりを洗ふ雛の日 山本 耀子

「播粉木のみどり」は草餅の蓬のみどり、または豌豆の餡のみどりなどを想像する。この句の中の「みどり」は絶対である。それが即ち「雛の日」なのである。この作家、時に陥る作品もあるが、食べ物の作品には秀作が多い。それはいきなり深い所から入ることが出来るからである。

石積んで何かはじまる冬の川 田中 英子

「何かはじまる」は作者の正直な気持ちであり、この句ではこの部分が具象に当る。「石積んで」は、何か魚を捕る仕掛けであるようでもある。冬の冷たい水の中、一生懸命な男達の行為に作者は興を覚えたのである。

波音にセーターの袖のびてゐる 渡邊 美保

この句の「波音」は、冬の暖かい日の波音である。ひたひたと岸を打つ静かな波音である。「袖のびてゐる」は手を下げている状態とればよい。暖かさ故のこころのゆとりの行為である。従来の俳句的パターンの外で作れる、現代的センスをこの作者は持っている。

紙風船打たれ上手でふくらみぬ 加藤 君子

「打たれ上手でふくらみぬ」は、簡潔で巧い表現である。打たれる度に空気が入り、折目も解かれ、膨らんでいくのである。即ち「打ち上手」でなければこうはいかない。この句、ちよつとオーバーに言えば人生の生き方の提示でもある。

踏切に立春の顔並びけり 河崎 尚子

「立春の顔並びけり」は、実際は皆の顔が生き生きとしていた訳ではなく、仕事に疲れた顔もあつたに違いない。「立春の顔並びけり」は作者自身の思いである。今日は立春であると言ふことを意識していたところがこ言わしめたのである。そう思つてみれば辺りの風さえそう思えてくるのである。

伊勢人の手拭野火を操りぬ 井上 恵李

「手拭野火を操りぬ」は、風流で器用な伊勢物語の主人公がちよつと浮かんでくる。固有名詞が成功した時は意外なほど一句を膨らませるものである。

摘草のふみこみ過ぎて立ち止る 橋本 晴江

この句の「摘草」は目で追うて先へ先へと摘んで行く蕨や薇であろう。ひと息入れる為に立ち上つて眺めると、意外に遠くまで来ていたのである。一緒に来た人の姿も見えず、ふいに不安感に襲われたのだろう。「ふみこみ過ぎて」は蕨や

薇採りなどの在り様を的確に捉えている。

吊るしある玉葱の芽の出そろひぬ 高尾 豊子

「自らその頃となる釣葱 虚子」は自然の移り変りの嬉しい感動であるが、豊子さんの「玉葱の芽」は全く嬉しくない。農業のことを知り尽くしている作者にしては迂闊だったであろう。「出そろひぬ」に品の良い俳味がある。

ぶらり来て黄泉平坂土筆摘む 廣畑 忠明

「黄泉平坂」は現世と黄泉との境にある坂である。作者にとつてのその坂には土筆が生えていたのである。一見誰もが可愛らしく思う土筆であるが、見ようによれば他の植物とは全く違った不可思議な形をしている。「黄泉平坂」の納得できるところである。「ぶらり来て」の分量も良い。

昼火事に出合ひ旅人同士なり 堀 志皋

見知らぬ旅人と一緒に眺めながら「凄いなあ」とか「よう燃えるなあ」などと言ひ合つたのであろう。「旅人同士」は共通体験をしただけの仲、挨拶も無しにまた別れたのであろう。

同人 I

# 恒星圈

野澤あき

湯の町を通る墓参や梅の屋  
クラス会の靴新らしき春の雨  
きさらぎの風に戻りて灯を点す  
在校生座り直せし卒業式  
子とその子爪を噛みをり桜

戸田 春月

波田美智子

冬萌や貨車に貨車足す鈍き音  
おぼろかな角隠してふ被りもの  
パンジーにからくり時計のふた開く  
島々をヨットがつなぐ春の風  
考へは人それぞれや水菜切る

久に会ふ稚児のはにかみ木の芽風  
カトレア展出で春光に手庇す  
暮遅し稚児に遊んで貰ひをり  
黒煙を残す汽車あり春シヨール  
ぶらんこに暫し遊びし尉と媼

長屋 璃子

廣畑 忠明

納税期去年も今年も雨もよひ  
一と文字を毀たれし墓冴返る  
竹箒もて掃くに足る春の雪  
まんさくの丈余に咲きて驕らざる  
紅梅に厳めしすぎる門であり

媼らの足湯に芽吹く雑木山  
早春の日は調教の馬へ降る  
紅梅や厩舎より馬引き出さる  
語部の長き眉毛の余寒かな  
ぶらり来て黄泉平坂土筆摘む

# 獅子座

山尾玉藻推薦

松井倫子

貰ひ手の決まりし子猫のど鳴らす  
春の雲螺旋階段のぼりをり  
ぬかるみを避けゐる度に春兆す  
ペンギンの十字に泳ぐ春の雪

中野八重子

臘梅の香るふる里姉病みぬ  
延命措置拒みて鴨を見てをりぬ  
きさらぎやわが心電図みだれたる  
畦を焼くけむりの中のみどりかな

坂口夫佐子

寢殿のまなか寂しき金屏風  
葦の角男系女系とかまびすし  
立春の嵯峨野の畝を見にきたり  
節分の空やはらかく雨あがる

中上照代

ころころと笑ふ看護師春隣  
薬局のそばの沈丁ひらき初む  
昨日一分今日は五分咲き沈丁花  
早咲きの丁字ほめ合ふ雨の中

福西礼子

今更に差知子師を恋ふ水仙忌  
桜貝生きて夫婦の笑ひ合ふ  
新築や春の日あふれ母在はす  
百坪の夢の叶ひし春の風

西畑敦子

竹垣の縄の緩める露の臺  
高階の暮しやうやう節分草  
御僧に褒めてもらひし雛かな  
足腰の話などして針供養

加藤廣子

振り下ろす鋏に付き来る蓬かな  
茅葺に雫の光る春の宵  
青空へぐんとひともと梅芽吹く  
橋渡る川上に橋夕朧